

—— チェルノブイリに思いをよせて ——

ポレーシエ

特集 『10年目のチェルノブイリ』



1996年 4月26日

スタディーツアーの一行・移住者の村ゼレムリヤのしらかば林にて

《事務局》〒466 名古屋市昭和区楽園町137-1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：神野英樹

【郵便振替】00880-7-108610

☎FAX:052-836-1073 (月・水・金・10:30~15:30)

(問い合わせは、お名前とシールの番号を明記し、返信用切手を同封の上、なるべく郵便でお願いします。)

「107通の手紙」の人々に出会って

ジトームルでは、スタディツアーの一行を、4人のおかあさんたちも首を長くして待っていました。

90年末から始まった チェルノブイリ救援・中部の「マザー to マザー」キャンペーンで、日本の母親たちと文通していたニーサさん、アンナさん、リュドミラさん、ソーニャさんです。

キャンペーンは被災者と支援者がモノだけでなく、心のきずなをつくらうとの願いで始めたものですが、みなさんのご存じの通り、ごく一部の人を除いて、この文通も途絶えてしまっていました。あまりにも激しいインフレのため、切手代もばかげた値上がりをしたためです。

十周年を前に、救援・中部では、かつて手紙をくれた母親たちの消息を尋ねようと、返信用のクーポンを入れて手紙を出しました。今回、ジトームルで会えたお母さんたちも“十年目の返信”をくれた人たちです。その手紙の行間に、書き切れない思いを込めていた、お母さんたちはツアーの一行を目の前にして、重い言葉を吐き出しました。彼女たちの手紙とともに、その言葉の一部を紹介します。 (浩)

※文通相手のソーニャさんと中川妙子さんが、この日、感激の対面をしました。



スタディツアーのメンバー14人と「107通の手紙」の家族たち(ジトームルにて)

今日は、親愛なる日本のお友達！

お手紙どうもありがとうございました。皆様からの手紙を受け取り、大変うれしく思いました。ウクライナの生活はとても困難になりました。工場や職場では人々は賃金を受け取れなくなっています。生活はなりたちません。学校では、しばしば子どもたちが空腹で卒倒します。子どももなく、国の補助もないお年寄りたちは、地面からのパンのかけらを拾い、ゴミ容器をかき回す始末です。恒久的な生活の場をもとめて、外国へ行ってしまった知人が私にはたくさんいます。ウクライナでは、死亡率が出生率をはるかに越えました。わたしもまた家族と共に外国に行ってしまうたいのですが、そのための資金がありません。カナダが受け入れてくれますが、それには4人家族で、2万ドルが必要です。でも、そんなお金はありません。

わたしたちの健康についてお尋ねでしたね。

たまたま手に入るものを食べている私たちに、どんな健康について語れというのでしょうか。子どもたちは、果物も野菜もジュースも見ていません。店にはパイナップルもバナナも売っていますが、とても高く買えません。ビタミン剤3箱で月給の半分はします。しかし、くすりに関して言えば、この値段に当てはまりません。（それを）買える少数の人々だけに買われているほどの値段です。外国で治療できるのは、上役の子どもたちか、裕福なビジネスマンの子どもであり、お金の払える人の子どもだけが、休息にいきます。

このように私たちは暮らしています。とは言え、定めなき生活です。皆様、私たちの暮らしや、健康や、仕事に関心を持ってくださってありがとうございます。

私は日本へ行ったことはありませんが、日本女性の美しさは世界中に知られています。私はすべての女性、お母さんたちと共に、もっと美しく、もっと幸せに、もっと豊かになるように祈っています。世界中の平和のために、地球上の子どもたちすべての健康のために、お母さんたちみんなの幸せのために、永遠の善意と愛と希望のために！

96, 3, 1

敬意をこめて、シャチコ、アンナ、アレクサンドロブナ

アンナ・シャチコさんの話

(夫と、15才の娘オリガさん、10才の息子スラビク君が同席)

「文通は、地元の新聞で知って始めました。3通、手紙をもらい、もちろん、すべてに手紙を書きました。子どもは二人とも元気ではありません。息子は事故のあった年に生まれました。最近、よくけいれんを起こします。医者に見せても原因は不明のままです。私は、チェルノブイリ事故のせいだと思っています。薬草を使う私立病院にいますが、いろいろな薬を飲ませてはならないと言われました。でも、薬やビタミン剤はもちろん、食料品もなかなか高く買えないのです。一家でカナダに移住しようと思っています。(カナダには、ウクライナの移民社会がある。)

「なんとか、みなさんの力を借りたいんです。」

こんにちは、尊敬すべき日本のお友達！

私たちを忘れずに、そしてお手紙を書いて下さって、どうもありがとうございます。今までに私たちには大変な時がやってきていますが、良くなるには長くかかるかもしれないし、ずっと良くならないかもしれません。

一通の封書は、あなたがたのところまで、今は12万カルボネツですが、以前は5ルーブルでした。

私の息子の身体障害について、少し書きます。惨事後、話したり、理解するのをやめました。彼の病気すべてに、さらにもっと多くの病気が付け加わりました。すでに、2回両眼の白内障の手術をしました。さらに数回の手術をする必要があるのですが、2回目の麻酔が悪くなって、今のところ私自身が、医者に手術するのを許していないのです。息子は心臓の欠陥があり、子どもの脳性麻痺で、両眼の近視と精神的な病気と、たくさんその他の病気があります。それで私は、息子一人を240万（1ドル=19万クーポン）の年金で育てていますが、私の給料は160万で、11月から給料を受け取っていません。集合住宅の部屋代は600万です。もうすでに数カ月間部屋代を支払うことができず、4月から何回か部屋代が値上がりします。

これらのお金は、ただ一つのパンになるだけで、もうミルクを買うことも忘れてしまっています。肉やソーセージは言うまでもなく、ビタミン剤に関しても言うことはいないでしょう。息子は成長しており、衣類や靴だって必要なのです。

今年の冬、私は息子をまだ一度も外へ連れ出していません。寒くて、靴と帽子が小さいのです。春がやつてくる様子は分かりませんが、息子は窓の所にいて人々を見ています。薬もないし、子どもたちは、私の息子のように風邪を引きやすいとか、その他の病気にかかりやすいのです。

私には、息子の未来が恐ろしく思われます。私自身の健康もすでに悪化しています。子どもは、もうすぐ13才で、私は彼を手で抱いて運ぶことができません。もちろんすべてのことについて、書くことはできないし、自分の痛みを表現できません。私たちの町だけでも、幾人かの障害児がいますし、また生まれ続けています。

私はチェルノブイリ10周年に、あなた方の国から代表団が来るということを知っています。あなた方とお会いしたいと思います。もしかしたら代表団の中に医師がいて、障害児を検査してもらえないでしょうか。私はそれがかなえられないということは、分かっているのですけれど・・・

お手紙に対してもう一度お礼を申し上げます。

あなたがたの暖かい希望の言葉と ご理解に対して。

息子と私より

コズィレヴァ・ニーナ・セルゲエブナ

ニーナ・コズィレバさんの話

(13才の息子と、年老いて耳が遠く
なった母親も同席)

「息子、オレークはもともと脳性マヒでしたが、それでも事故の前はまだ言葉を話せたのです。あの年、長い冬が終わって、オレークは外に、陽の光の下で遊びたがりました。あんな恐ろしい悲劇が起こっているとは知らずに、私はオレークを外に連れ出して、通りを散歩していたのです。事故の情報がなかったし、知らされてからでも、そんなにひどい事故とは思わなかったんです。

事故のあと、息子の障害は急に悪くなり、白内障も患いました。目は既に二回手術していますが、あと二、三回は手術が必要といわれています。でも、そんな経済的余裕は私にはないのです。未払いだった給料は手紙を出した後に、またもらえるようになりました。でも十二月から二月までの分は、もらえずじまいです。家賃はここ四カ月払っていません。

(未払いで追い出されないのですか?)

「だって、払えないんだからしょうがないじゃないですか。ジトームルでは、私のような母親350人が『子ども障害児連盟』を作っています。ぜひ25日に市内である集会にきてもらえませんか。」

「一人でも二人でもいいから来てほしいんですけど……。実は、行政からは息子を施設に入れたいか、と言われてます。でも、私はこの子の母親です。私が見なくては。施設に入れてしまうなんて、そんなことはできません。今回、みなさんの中にはお医者さんはいませんか?こちらの医者は信頼しきれないので、診察してほしいのです。」

(残念ながら、いません)「では、日本のお医者さんがくる予定はありませんか?」(ごめんなさい。今、確かなことは言えません。)
「そうですか、分かりました。」

リュドミラ・キューブチャクさんの話

(夫のビクトルさんと、
14歳の息子ニコライ君が同席)

「ニコライは、よくけいれんを起こし、呼吸困難になります。どこの医者に見せても、2、3年すれば治るからと言われますが……。長女は21歳で結婚しましたが、この子も頭痛で悩まされ続けています。とうとう悩みを日本のお母さんたちにも分かってもらいたくて、今日、ここに来ました。」

(移住基金スタッフにうながされて、ビクトルさんも話し出す)

「私はバスの運転手でした。88年の5月2日に、突然、上司に呼ばれました。『とても大切な仕事がある。もしこの仕事に従事したら、第2次世界大戦に参加した兵士のようにになれる』とだけ言われました。つまり、普通の人以上に高い年金を受け取れ、しかも一般の店にはないような食品も特別に買えると言うわけです。

で、汚染地域に行ったら、誰も住民はいません。何の仕事をするのか分からないまま、二日いました。それから、住民を非難させる仕事が始まり、キエフの南30kmにあるワシニコフという町まで住民を乗せて行きました。



ニーナさんとオレーク君

その後、体の調子が悪くなったので、チェルノブイリ事故による障害者手帳を取得しようと思いました。ところが、事故のときに勤めていた運送会社に行くと、もう運行記録や出張の記録はないというんです。困ってしまいました。それで、私のバスで逃げた住民を探し、証明してもらうことにしました。行政とたたかってやっと手帳を取得できたのです。

以前は、手帳をもつ人のための特別な店があって、助かりましたが、この店も突然閉まってしまうしました。ここ半年は、何も受け取っていません。高血圧で上が200で、下が100です。頭痛は慢性的だし、腫瘍も右脇にできました。」



ジトーミル州立小児病院で出会った子ども

ろうそくの灯 (学習ツアーに参加して)

中川妙子 (埼玉県)

4月29日、朝8時5分、関西空港着。新幹線にて埼玉の我が家へ。花びん、ケーキ皿セット、ジャム、キウリ漬など、合計10キロほども手にして、電車を乗り継ぎ我が家にたどり着く。お母さん寝るね、とお昼寝。夕方起きてパツパツとごはんを作り、夜また、グーグーと眠る。あ、早々、久しぶりに体重計に乗った。2キロおまけがついていた。(あの苛酷な状況で2キロもよ!!)

3日間、のらくらと暮らした。昼も夜もほんとうに眠かった。5月10日、仕事でロシアに出発した。その前に、大長編傑作旅行記が完成している予定だった…のに一行も…。ロシアから帰ってみると、ウクライナがもう随分と昔のことになってしまっていたような気がする。

今、部屋のピアノの上には、今回の旅行でソーニャから貰った花びん。テレビの上には、ソーニャが送ったくれた人形。誰もが「何、この人形」と言ってゲラゲラ笑うウクライナのひげのおじさん人形。イヤリングを取り出すたびにソ連的な音で歌うオルゴール、私の誕生日にソーニャが送ってくれた。

粉ミルクの時も、保育器の時も、医師を研修に受け入れた時も、私は埼玉でじつとしたままだった。何もしなかった。していたのは、ソーニャとの文通だけ。ポストに入れた瞬間から返事を待った。ソーニャの手紙、彼女の存在は、私の心の中に、小さなろうそくの灯を、いつも灯してくれた。今度の旅で分かった。ソーニャにとっても、またそうだったのだと。チェルノブイリとのこんな小さな付き合い方もあるのだと。

移住者の村での慰霊式典、その細いろうそくの灯が忘れられない。

ウクライナを訪ねて

・・・スタディツアー参加者より・・・



4月20日 キエフの街かどにて

今回のツアーでは、宿泊先がホテルではなく保養所（サナトリウム）だった。

保養所とは、子どもたちが汚染地や移住地から来て、数週間以上を暮らす施設だ。その期間や場所はいろいろあるようだが、非汚染食品を摂ることで、滞在する間に体内放射能が減って行くそう。子どもたちと同じ施設に宿泊できたことは、その内部を知るのに好都合だった。

ジトームル市内で、この4月26日に新たな保養所がオープンした。しかし、既存の保養所の維持管理費は、後回しにされているのではないかと。例えば、宿泊先のトイレ。ドアが閉まらない、水を流すコックが壊れたまま、便座がない、水がよく流れない…。健康体でも不便に感じるのだから、病弱の子どもたちが毎日生活する施設としては貧弱だ。

もう一つ印象に残ったのは、道路のひどさである。ジトームル市内でも、未舗装のところは、凸凹をなくすための補修など全くしていないのではないかと思うほどの悪路。また、どこまでもひたすらまっすぐ続く郊外の道路は、砂利にタールを流ただけで、車のクッションの硬さと相まって相当体にこたえた。「病人を運ぶと、よけいに容体が悪くなる」というウクライナの悩みも、実感をもって知ることができた。

道路、保養所だけでなく、病院の崩れかけた階段など、至る所で維持管理の悪さが目に付いた。行政は、表面的に評価されることを優先させて、それ以外の事まではとても手が回らない状態なのだろう。きわめつけは、ナロジチの病院に水道配管の設備がないこと。「外見さえ整えれば」という思想の表れなのか、私たちの常識を超えることだった。

ソ連崩壊後の経済混乱の中で、チェルノブイリ対策費用が重くのしかかっているのを、目の当たりにした旅だったように思う。

（高橋 民枝・名古屋市）

ポレーシェ

チェルノブイリ、チェルノブイリ、にがよもぎ
あの悲劇から10年たった
不安の中かの生活者は 何を想い 何を求めているのだろう
病院や被災者の方々の言葉は胸に重く沈む
私は祈る

「チェルノブイリの被災者の方々の心身の苦痛を和らげてくださいと」と・・・

ポレーシェ

すっと立った宿り木 繁る病んだ木々 散らばる池 肥沃な土地
抱擁とキスで優しく暖かく迎えてくださる人々を蝕む
刻々と日々芽吹きはじめた柔らかな黄緑色が美しい、されど汚染された大地
ああ、あの美しい大地にくちづけする日は・・・
白樺林に咲き乱れる花を摘み、くださる
胸ポケットをかれんを彩るかわいらしさにくちびるを寄せる

ポレーシェ

ガイガーカウンターが目盛りが忙しい上がる
誰もいなくなった村々の美しい教会に祈る人はいない
道端に、建物に、土や落葉に、雨どいの下に、上がるカウンターの目盛りを追う
私は忘れない あの美しいウクライナを・・・
お金と時間と機会が与えられたら 幾度でも訪れてあの大地に立ってみたいと思う

ポレーシェ

私は知らされてきました 勉強の機会もありました
しかしこの目で見、人々とふれあい、汚染された大地に立って想う
忘れてはいけない 続く未来に差し伸べる手を引いてはいけない
祈りを絶やしてはいけない 語り継がねばいけない
仲間と手を取りあって協力しあわねばいけない
多くの方々の心を寄せていただかねばいけないと・・・

久美子（長野県）





私がホームステイしたのはジャーナリストのセルゲイ=ソロカさん(40)一家のところでした。奥さんのニーナ(45)さん、娘のイリーナさん(15)の三人家族で、ジトーミル市内の集合住宅の一室に住んでいます。部屋は台所と風呂トイレの他、洋間(当たり前か)2部屋で、私がイリーナの寝室兼居間を使ったために、彼女は近くのおじさんの家に泊まったそうです。

セルゲイさんとイリーナさんは少し英語ができたので会話はほとんど英語でやりとりしました。ニーナさんはロシア語かウクライナ語しか話せなかったため、直接話すことができず残念でした。でも、夕食と翌日の朝食は腕によりをかけてものをたくさんテーブルに並べていただき、大感激でした。特に、ヴァレニキ(チーズの餃子)にはびっくりしました。

居間のTVではどこかで見たことのある「ダイナスティ」など、アメリカモノが増えていようです。住宅事情は悪いとか、政治家は無責任なおしゃべりばかりしているといったセルゲイさんの話には、日本のいまの様子をつたない英語でお伝えするのがやっとでしたが、多方面にわたって話ができただけは大収穫でした。また、以前訪問した渡辺さんや坂東さんの写真を持ってこられ「いまどうしてる?」と尋ねられたので、お二人ともお元気ですとおこたえしておきました。坂東さんは知っていると答えたら、喜んでいただけました。

翌日の出発前に居間で撮った写真を先日送ったのですが、イリーナは学校へ行った後と一緒に撮れなかったのがちょっと残念でした。とってもかわいい女の子だったのに・・・

(野上明人/富山市)

私がホームステイしたのは消防士さんの家です。チェルノブイリ事故後の作業に従事した後、何度か引っ越し、現在はジトーミルリ社宅に住んでおり、今のところ健康上は特に問題ないようですが・・・

37才の夫妻と14才、11才の男の子の4人家族。夫妻の部屋と子ども部屋、応接間、ダイニングキッチンがあり、日本の我が家よりうんと広い!それに水の流れるトイレがあり、バスタブのあるシャワー付きのお風呂もあり、水の出ない病院や診療所を見て来たことを思うと、かなり良い暮らしぶりではないかと思えます。「ノリコ、シャワーをどうぞ」(もちろんロシア語で)と言われたが、出掛ける前に水で洗ってきたばかりだったので、「ニエ、スパシーバ」と断った。それより、遅く着いて時間がなかったので、少しでも話がしたくてロシア語の辞書と首っ引きで、懸命にコミュニケーションをとろうと試みました。ワインやチーズ、チョコレート、紅茶などの用意をしてくだのは、もっぱら夫のステファンで、妻のケイトと私は話に夢中。朝食も、私とケイトが話をしている間に、ステファンが手際良く作ってくれて、これがまたおいしかった!ふたりの息子は、私が持って言った“めおと箸”が気に入り、一生懸命使っていました。

おみやげはウクライナのめおと茶碗(ペアのマグカップ)で、日本に無事持ち帰り、中2の娘が、いばったママの顔の付いたカップを気に入り、毎日使っています。とにかく、フレンドリィでステキな家族です。

また、会いたい!

(樋口則子・名古屋市)

《スタディツアーで印象に残ったこと》

(神野 美知江・名古屋市)

私の職業は、看護婦である。私は、患者を見る時、「医療機器や医薬品が足りない」という経験をしたことがない。患者に必要な医療は、しかるべき診療機関に行けば、十分提供されるものだと思い込んでいた。

「移住者の村ゼレムリア」の診療所を訪問した時、医療施設とはほど遠い建屋を見て、この地方の診療所は、みんなこのように、手作りで家庭的なんだと勘違いしてしまった。しかし、実は「水道の設備さえない、一般家庭用の粗末な家屋に、仮住まいしている。」のであり、アタッシュケースに大切に保管された、わずかばかりの医薬品が、「300名の村人の命を守るすべてである。」と聞かされた時、日本の薬局しか知らない私は、大きな衝撃を受けた。

診察を受け、診断もされた患者に、「しかし、貴方を治療する薬がない。」と告げなければならないなんて、医療従事者として、こんな悲しい事があるだろうか？

日本にもどり、この事を友人に話すと、どの友人も「私に何かできる事があったら教えてね。」と言ってくれる。私も、今回のスタディツアーで心に刻み込まれた、たくさんの方の出来事を、決して忘れることなく、これからも「救援・中部」に関わっていきたいと思う。

自分の目で確かめるという事は、誰の言葉よりも信頼できる「真実」を知ることであると痛感した。今回のツアーに参加できて、本当によかったと思う。

4月から代表が変わりました

〈救援・中部をご支援くださる皆様方へ〉

皆様、こんにちは。私は、この4月から一年間、渡辺春夫さんのあとを継ぎ、チェルノブイリ救援・中部の代表をさせていただくことになりました 神野英樹 と申します。常日頃から、救援・中部の活動に暖かいご支援をいただき、深く感謝致します。チェルノブイリの事故から丸10年が過ぎ、人々の記憶から徐々に消え去ろうとしているにもかかわらず、現地（ウクライナ）では今、益々困難な状況が続いています。先日のスタディツアーでは、たくさんのお子様達が生きる希望を持って、病気をたたかっている事を知りました。移住者の村では、医療機器も医薬品も足りない中で、献身的な治療が続けられている事を知りました。チェルノブイリの事故は、終わろうとしているのではなく、10年間人々を苦しめ続け、さらに深刻さを増しているのです。

私達は、この困難を一人でも多くの人々に知らせ、救援の輪を広げていきたいと思っております。

ますますのご支援・ご協力をお願い致します。

チェルノブイリ救援・中部代表 神野 英樹



ゼレムリア村で歓迎をうける神野代表

ユーリさんから日本語の直筆の手紙が届く！

友 達 へ

少し時間ができましたから息子の様子について手紙を書くことができるようになりました。

一ヶ月前、日本からもらった薬を使った化学療法によって、二番目の手術ができるようになりました。ウクライナではこのような難しい手術は初めてだったと、十年の経験を持っている医学博士が言いました。

六時間半ぐらい続いた手術の時に、もしそれをしなかったら、息子の命はあと一ヶ月だったにちがいないと医者は知りました。腫瘍が、もう大動脈を取り囲んでいたからです。

手術の日からもう四週間経ちました。息子は手術の三日後やっと歩き始めましたが、今は外で自由に散歩することができます。

もちろんまだ大きな危険が残っています。血液の中に腫瘍の細胞が残ったからです。ですから二週間前にまた化学療法のクールが行われました。

これからもう一、二度あるでしょう。それは体に大変害がありますが、他に方法がありません。病気で苦しみながら、息子はそれを一度も訴えませんでした。相変わらずわらって、冗談を言っています。

私はどんなに危ない病気がよく知っていますが、それでもよくなるように祈っています。

最近、キエフに春が来て、木の花が咲き始めました。

あなたがたからもらった薬と医者のおかげで、息子はそれを喜んで見ることが出来ます。ですから、私はもう一度、あなたがたにここから感謝したいです。皆さんにご健闘とご成功をお祈りしたいと思います。

もしキエフにいらっしゃれば、私は喜んで何でもお手伝いさせていただきます。

5月15日 シェフチェンコ・ユーリ



4月20日・キエフ空港にて（右はしがユーリさん）

「原発事故起きれば将来ない」

チェルノブイリ取材の記者強調

10年を機に来日、名古屋で講演



チェルノブイリ原発について、事故発生の一カ月前にすでに、事故の起きる危険性を指摘していたロシア人の女性ジャーナリスト、リュボフィ・コバレフスカヤさんが、初来日した。四月二十六日で事故からちょうど十年になるのを機に、日本を回り、その悲惨さと原発建設反対を訴えるのが目的だ。皮切りとなった

名古屋市中区での六日の講演会で、コバレフスカヤさんは放射能の恐ろしさを切々と語った。「原発に絶対安全なんて言葉は存在しない。人間が作ったものには必ず間違いが起こる。事故の一番の原因は、構造でも、国家体制でも、作業をした人のミスでもない。核エネルギーを甘くみた人間全体の愚かさです」。コバレフスカヤ

さんは、そう断言する。ウラル地方で教師をしていた時、生徒が白血病で死亡。それを機に、放射線や核に関心を持ち、チェルノブイリ原発の建設現場を取材しようと、近くの町プリアチに移住した。調査を進めるうち、チェルノブイリ原発が手抜き工事をして、いることを突き止め、その危険性を地元紙で発表した。しかし、一カ月後の事故で娘とともに被災。後遺症で甲状腺を切除し、現在もホルモン剤に頼りながら、キエフで被災者の救援と作家活動を続けている。「住民は放射能に対する認識がなかった。知識があれば、国ももっと早く警告を出していれば、あんな惨事は、そう断言する。ウラル地方で教師をしていた時、生徒が白血病で死亡。それを機に、放射線や核に関心を持ち、チェルノブイリ原発の建設現場を取材しようと、近くの町プリアチに移住した。調査を進めるうち、チェルノブイリ原発が手抜き工事をして、いることを突き止め、その危険性を地元紙で発表した。しかし、一カ月後の事故で娘とともに被災。後遺症で甲状腺を切除し、現在もホルモン剤に頼りながら、キエフで被災者の救援と作家活動を続けている。「住民は放射能に対する認識がなかった。知識があれば、国ももっと早く警告を出していれば、あんな惨事は、

事にはならなかった」十年たった今も、傷痕は深く残っている。生まれてくる子供の九割は脳障害を起こし、甲状腺がんや死亡する例も多い。男性の半数近くは性機能が不能になり、死亡率が出生率の倍だという。「放射能は目に見えず、色もおいもない。だから迫ってくる恐ろしさを感じにくい。でも、一度、原発事故が起きればそこにはもう将来はないということを、もっともっと多くの人に認識してほしい」と訴えた。「日本ほど進んだ国がなぜ原発の危険性について認識できないのか。事故は阪神大震災のように予期できない形で襲ってくる。起きるからでは遅いんです」十六日まで、大垣、浜松、豊橋、長野、広島市などで講演を続ける予定。問い合わせは、チェルノブイリ救済・中部(0521-83611073)へ。

講演は、名古屋、大垣、土岐、浜松、豊橋、岡部、伊那の7カ所で行われ、成功のうちに終わりました。コバレフスカヤさんは、チェルノブイリの被害について科学、医学、政治、社会学など多方面にわたる専門的知識を備え、内容がややもすると難しくなりがちでしたが、体験に裏打ちされた話はたくさんの人たちに深い感銘を与えました。

コバレフスカヤさんの講演ビデオとテープを貸し出します。ご希望の方は、事務局まで。貸出料は500円です。(送料別)

～はるばる8000キロ～グメンチエク医師浜松へ

職員住宅に住み自炊の毎日です。日本の医師の働きぶりを見て「家族と過ごす時間はあ
るのか」と心配しながらも、睡眠時間を削って意欲的に研修に取り組んでいます。

聖美小学校での講演、中部スタッフとの交流など目の回るような忙しさです。

96.5.21 中日

ウクライナの子供のために

新生児医療

最先端現場で研修

聖隷浜松
病院で
グメンチエク
医師



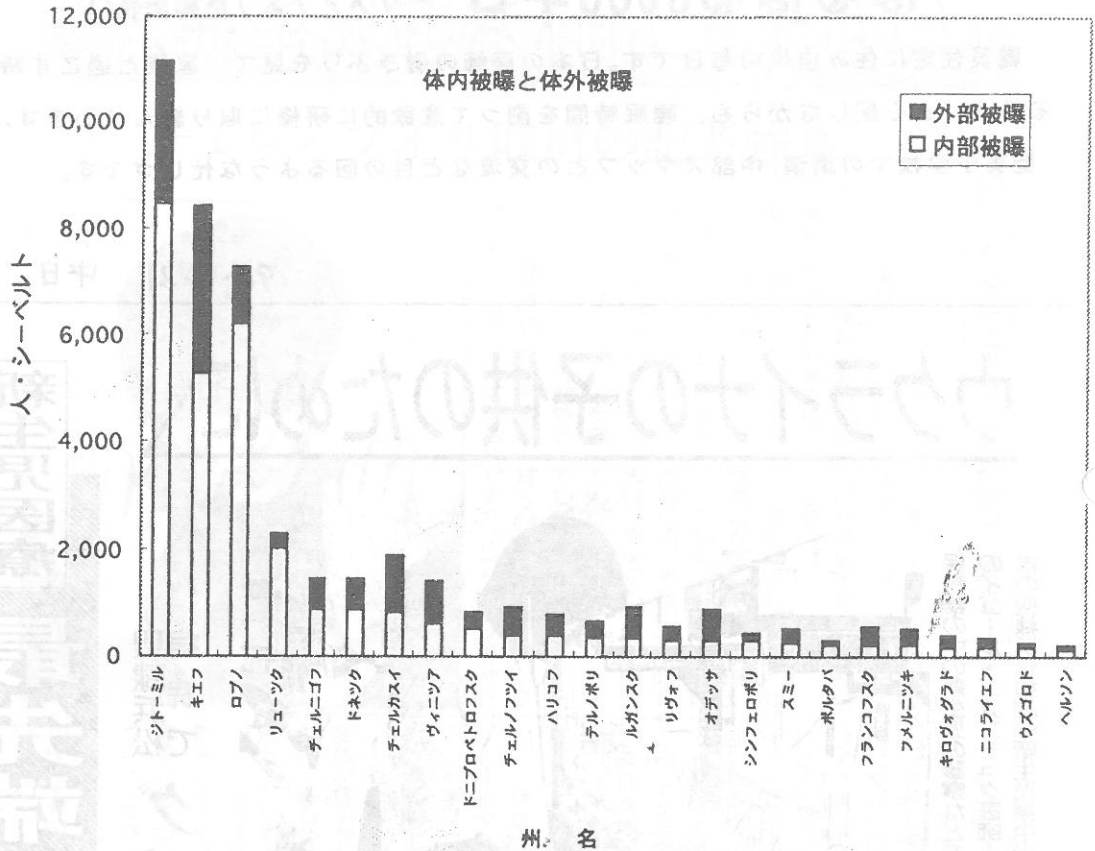
保育器の中の新生児の診察などをし研修中のイゴール・グメンチエク医師。浜松市住吉の聖隷浜松病院の新生児集中治療室で

『チェルノブイリ救援・中部』招く

チェルノブイリ原発事故の被災地ウクライナから来日、浜松市住吉の聖隷浜松病院で小児救急医療の研修をしているイゴール・グメンチエク医師(30)が二十日、同病院で記者会見し、研修から一週間の感想などを語った。この研修は、ウクライナへの物資援助などをしてきたNGO「チェルノブイリ救援・中部」(神戸英樹代表)が郵政省国際ボランティア助金の援助を得て、生活費などを負担、聖隷浜松病院が協力した。研修は六月八日まで。

「ウクライナでは、放射線関連だけでなく、伝染病も増え、子どもの病率が高い。子どもたちが幸せな生活ができるようにするために研修に来ました」というグメンチエクさんは十三日から研修中。日本で最初に新生児救急車を導入した聖隷浜松病院・新生児未熟児センターで、救急車に乗るなどし、新生児医療の最先端現場で実務経験を積んでいる。

会見でグメンチエクさんは「ウクライナの病院との比較は難しいが、すばらしいシステムにびっくりしている。NICU(新生児集中治療室)は、どんな医師もここで働きたいと思うだろう」と施設を絶賛。「医師、看護婦が一人ひとりの小さな子どもに対し大きな責任を持って接しているのに感銘を受けた」とも話した。



チェルノブイリ事故から10年経ちました。汚染地域で暮らしている人々は、どのような生活を送っているのでしょうか。4月のスタディー・ツアーで訪れた、ジトミル州のナロジチ地区で、大変ショックな事を聞きました。地区の人民代表委員（市長さんのような人）のザイチェックさんは、昨年7月に訪問したときは「一日も早く全員移住したい」と言っていたのですが、今年の4月には、「移住は国にお金が無くてもう限界。今後、汚染地域でどうやって暮らしていくかを考えている」と言いました。ナロジチの人口は事故直後の移住で14000人までへったのですが、今は帰ってくる人が相次ぎ、17000人にまで増加しているのです。

上の図はウクライナにおけるこの10年間の放射能による全住民の被曝の合計（集積線量）です。ジトミルを始め汚染のひどい

北部の州では、被曝の程度が大きいだけでなく、体内被曝が7-80%を占めていることがわかります。つまり、被曝は主として汚染した食べ物によるのです。汚染した畑で作物を作り、汚染した肉やミルクを食べ、汚染した森の中で山菜やきのこを採って食べてきた結果がはっきりと顕れています。10年前に汚染した森の木の葉は今ようやく腐葉土になり、植物に吸収され易くなっています。実際、森の土壌の表面から5-10センチ位下が現在最も放射能レベルが高く、木材中の放射能は最近になって急増加し始めています。これからも汚染地域で住み続けなければならない人々にとって、食べ物を通じた被曝はこれからも長く続きそうです。不本意にも、原発事故の実験台となった彼らが、絶望的な気持ちにならないよう祈るばかりです。（河田昌東）

チェルノブイリ救援・中部の収支
(1995年4月-96年3月)

収入の部		支出の部	
項 目	金 額 (円)	項 目	金 額 (円)
前期繰越	11,522,936	救援物資関連	23,113,862
救援寄付金	6,146,493	(内訳) 医療機器代	7,722,225
(内訳) 個人 944件	4,099,765	医薬品代	10,788,435
団体 39件	2,046,728	粉ミルク代	3,090,000
国際ボランティア貯金交付金	16,048,000	救援物資輸送費および通関料	1,513,202
運営費関連	4,886,534	第1次医師派遣費用	1,963,524
(内訳)		第2次医師派遣費用	1,289,613
維持運営費カンパ	4,243,546	コヴァレフスカヤ講演会	386,705
(内訳) 個人 235件	1,486,246	阪神大震災関連支出	541,137
団体 17件	2,757,300	運営費関連	5,398,158
書籍等物品売上	642,988	(内訳)	
預金利息	146,534	通信費、郵送料	1,823,390
		電話代	622,134
		印刷費	171,965
		備品、修理費	309,817
		国内出張旅費	288,219
		会場費	22,055
		備品・消耗品	94,676
		人件費	1,415,890
		家賃・光熱費	534,743
		雑費 (振込手数料等)	115,269
		小 計	32,692,999
		次期繰越	6,057,498
総 額	38,750,497	総 額	38,750,497

あなたも維持会員になって下さい

チェルノブイリ救援の活動を続ける為に、事務局の維持費用が必要です。事務量が
増え、新しいスタッフも仲間入りしました。是非、事務局維持会員になって下さい。

☆維持会員会費 10,000 / 年 (または、1,000円/月)

(※通信欄に “維持会員費” と記入して、救援・中部の口座にご送金を。)

《事務局日誌》

4月9日 来日中のコヴァレフスカヤさんが、事務局を訪問。

5月11日 ウクライナから医師研修で来日された、グメンチュクさんが訪問。

3月から5月にかけて、チェルノブイリ救援・中部のさまざまな行事が続きました。
マスメディアからの取材、問い合わせなども相次ぎ、事務局は多忙をきわめました。
心ならずも、皆様への事務対応が遅れましたこと、おわびします。

10年目のチェルノブイリ

4月19日から29日までウクライナ（チェルノブイリ）へ行ってきました。

帰国して一か月、心のなかに、失われた人々のくらしや、美しい自然が深く刻まれて、日が経つにつれてより鮮明に思い出されます。

チェルノブイリ原発事故から10年、汚染された大地から収穫したものを、人々は食べ続けています。ほかの食べものを手に入れるお金さえ無いという現実の中で、多くの人が生きています。

私たちが滞在したジトームル州では教師、消防士、警察官などの公務員でさえ、この3か月間給料も支払われず、子どもたちの8割が病気という深刻な状況になっています。放射能の影響で免疫が低下した子どもたちには、あらゆる病気が慢性化していますが、親は子どもの健康を祈ることしかできません。

州立子ども病院では、未熟児や、高度の障害を持った新生児が保育器に入れられ、白血病の子どもたちにも会いました。移住者の村の診療所には、トランクの底にわずかな葉しかなく、ショックで言葉もありませんでした。

6年間、救援活動に携わってきましたが、本当に無力だと実感しています。そんなウクライナにも、春がきて、放射能で汚された広大な美しい大地が、また、作物を実らせます。いのちの糧となる食べものが、いのちを削ってゆくのです。

終わりのない悲劇という言葉が決して大げさではない原発事故の被害を目のあたりにして、“チェルノブイリを忘れないで”という現地の人たちのメッセージを、ひとりでも多くの人に伝えるのが、せいっぱい、私たちにできることです。

もっと詳しい話を聞いてみたいという方は、ぜひご連絡ください。

寺町みどり・新田幸子（チェルノブイリ編・岐阜 ☎fax0581-22-4989）

お・知・ら・せ

- ◇コバレフスカヤさん講演ビデオとテープ貸出—1回 1,500円（送料別）
 - ◆救援・中部オリジナルTシャツ—1枚 1,500円・ステッカー—1枚200円
 - ◇救援・中部オリジナルテレホンカード—1枚 1,000円/50度数
 - ◆『絵はがき集』—1セット5枚 300円（子どもたちからとどいた手紙や絵）
 - ◇『たった一回の原発事故で』—1冊 515円 + 送料 51円（救援・中部編 地湧社）
 - ◆『とどけウクライナへ～私たちの救援日記』—1,648円（坂東弘美著 八月書館）
 - ◇ネチポレンコさんと小児科医・ライサさんの講演録 1部 350円（専門家解説付）
- 《 救援・中部 事務局(☎FAX:052-836-1073)までお申し込み下さい! 》

チェルノブイリ救援・中部の被災者支援活動は、皆さんの寄付金で支えられています。是非、ご協力をお願いします。

《後記》☎私もウクライナへ行きたかったなあー。(まや) ♡つかれたあ〜。(み)
☺今年も冷夏とか。本当かな?(?) ☞特集“10年目のチェルノブイリ”は、いかがでしたか。ご意見、ご感想をお寄せください。(幸) (編集印刷・救援岐阜)